

「プラス思考の自分になるために」

—父との思い出をたどって自分を信じる事が出来る教育をめざして その1—

園長 高杉美稚子

昨年度は一年間にわたって昨年私がかかったメニエール病のこと、これまでの母（現名誉理事長）の入院を通して考える教育についてお話ししてきました。（詳しくはホームページの平成17年度の園長のページをご覧くださいけると幸いです）

今回は父(前園長)との思い出をたどりながらお話ししたいと思います。よく「園長先生はどうしてそんなにプラス思考なのですか」といわれますが、それはやはり父の影響が大きいと思うのです。

私の人生のターニングポイントにはいつも父の姿がありました。今、私がこうやって園長ができるのも、自分らしく自分でいられることもこの父の後ろ姿に教えられたとって過言ではありません。

私が、15才のとき脳腫瘍の疑いで開頭手術をしたことは皆さんもうよくご存知のことだと思います。あれは、筑紫女学園高校に入学して間もないころのことです。あのころの一年生は中学校の坂の上の校舎でした。長い坂を登って登校しなければなりません。ある日、その坂を急に上れなくなり坂の途中でうずくまってしまったのでした。激しい頭痛でした。

でもまだ15歳の私はしばらくすると、元気を取り戻し、教室に向かうことが出来ました。そのころはそれが何を意味するのかさえ知る由もありませんでした。

それから時折、朝の坂道や帰りのバスの中で急に、頭の中で、ジリジリという音が響きはじめるようになりました。頭の中で、水がゆれているような感じもしました。それはなんとも不思議な体験でした。そのうちにその変な頭痛の間が、近くなってきました。これは何か変だと感じ始めた私はやっと親にそのことを告げたのです。

すぐに大きな病院に連れていかれました。父45歳と母42歳のときに生まれた一人娘の私の病状に親の気持ちを今思うといかばかりであったかと思うのですが、診療が終わっても私には何の説明もなかったのです。そのことすらおかしなことだとも思わなかった私でしたが、病院からの帰り道、父が私の肩を「がしっ」と抱いて帰った感触は35年たった今でもこの肩に残っています。さすがに私もこれは何かひどい病気だと告げられたに違いないと、その父の手に感じたのでした。

それから国立病院への入院までの間、何かあったのか、何日経っていたのかさえ私には今でも思い出すことが出来ません。ただある夜、両親のはなししているのを聞いてしまったのです。その言葉は今も鮮明にこの耳に残っています。

[この子はもう長くは生きられない] と泣いている母に父が言った言葉です。

[この子が死ぬことを考えるのではなくて、15年も私達の子どもでいてくれたではないか。15年この子の親でいられたことに感謝しよう。]

いつも、究極のプラス思考の父らしい言葉でした。

布団の中でその言葉を聞いた私はこれから何かあっても父の気持ちを大切にしよう。この父の子に恥じない娘でいようと決めたのでした。そのときは涙もでませんでした。一度も病気をしたことがなかった私にとって、はじめての入院に不謹慎にもかえってわくわくしているような気持ちでした。入院を楽しんでいる私ですらありました。そしてなぜかしら、死ぬ気はまったくしなかったのです。まだ若い私は助かると安易に確言していました。

今でも新しい体験をするときにはいつもわくわくする自分は変わらないですね。そして何かあっても、乗り越

えてやろうとする今の私のプラス思考はこのときの父に培われたと思えるのです。

国立病院に入院してからは、いろいろな検査が行われ始めました。病名は「脳腫瘍の疑い」だったからです。検査には大変苦しい思いをしました。当時はCTもMRIもない時代でした。脳の中を調べるためには「血管造影」しか方法はありませんでした。えびのようにまげた腰に何度も注射をし、おなかから管を通して頭に造影剤を送り、機械に映し出すものです。最後には頭開手術を受けたのですが、全身麻酔のこの手術より、この「血管造影」の検査のほうが私にははるかに苦しいものでした。下半身麻酔でしたので、医師の話など全て分かるのですが、そのうち私は、意識がなくなっていました。

そして、気がつくと私のベッドは雲の上でした。白い雲の中をベッドがふわふわ浮いていました。そしてそのベッドは空の上の方にある感覚でした。ずっとこのままよくだよっているのだと感じているとふと私を呼ぶ父と母の声がひとこえ聞こえたのです。「みちこ・みちこ」その声は今も忘れることはできません。その声を聞いたとたん私の寝ているベッドはスーッと下に下がって病室に戻ったのでした。

今でも、あれが「臨死体験」というのだろうかとき折フワフワと浮いていた感触を思い出すのですが、あの時のことを考えるとこれから自分が死に行く時の感覚を知っている人間の強さを感じたりもします。

きっと、天に召されるときは気持ちいいのだろうと、思える私がいるからです。

また別の検査は、隔離室で行われました。扉が10センチ以上はある重い扉の隔離室でした。面会も出来ませんでした。でも父は執念でした。どこからか道を見つけ、そしてその部屋の場所を探したのでしょう。その隔離室の高い格子のある窓の外。多分扉の外だったのでしょうか、いえ、扉によじ登ってくれていたのかもしれませんが、父の声がかすかに聞こえるのです。「元氣か。がんばれ」検査の間毎日来てくれるその声が楽しみでした。

そして検査の結果やはり「脳腫瘍」の疑いありということで10数時間におよぶ「開頭手術」をすることになったのです。手術より髪を丸坊主にするののほうが15歳の私にはつらいことでした。

でも父の『一生心配して過ごすより、手術をして、頭をあけてみて、悪いところをとって安心したほうがいい』というプラス思考の言葉が私の背中を押したのでした。手術室のこうこうと照る丸い明かりと麻酔をかけて4つ数えたところで意識がなくなったことだけ覚えてます。

私には一瞬に思えた手術でしたが、父と母にとっては、15歳のくりくり頭になった娘の画面越しに見る姿にどんなにかつらかったことでしょう。

結局腫瘍はなく、脳室が広すぎるために起こる水頭症のための頭痛の診断でこのままでは失明の危険があるということで頭蓋骨から首、腰への通路を作るためにシャントを入れる手術がなされました。今でもここに管がはいっているので、長時間背をのばす正座はつらいものがあります。

術後はICUでしたが、頭を動かすたびに頭の中で、水がごぼごぼと流れる音がし、寝返りも頭を動かすことも出来ませんでした。でも父は見舞いに来るたびにいつも「頭を空けてよかった。なにもしないよりあけて安心した」といってくれました。

今の私が【何もしないで後悔するより行動して反省する】という心情を持っているのはこのときの学びからきているのだと思います。

でもつらかったのは同じように頭をそってくりくり頭になった私より小さいかわいい子が、手術でICUに行っている間に何人もいなくなったことでした。そしてその病室で、ただ一人脳腫瘍ではなかった私でしたので、父と母の周りの患者さんの家族に対する気の遣い方は並大抵ではありませんでした。あの子達とおなじ、脳腫瘍だったらどんなに楽だったろうかと私に思わせたほどでした。

私はこのときほど、脳腫瘍そして脳科学関係の本を読んだことはありません。今、吉塚幼稚園の教育が脳科学にもとづいた教育内容で実践することにしたこともこれ以後読んだ本が影響しているといって過言ではありません。

私は自分の病気のおかげで人の体の仕組み、特に脳の仕組みには、このころから関心を持つことができたのです。だからこそ危機の時パニックにならずどう対応していったらよいかという危機管理能力みたいなものが、少しは身についてきたのかもしれない。

科学的な根拠に基づいた教育を考える第一歩でした。私に、示唆を与えてくれた著書には下記の様なものがあります。

高木貞敬著「子育ての脳生理学」シリーズ、時実利彦著「脳の話」「脳を育てる」「脳と保育」「脳を考える」、松本和雄著「子供の脳と心」荒井良著「脳と健康」「脳とからだ」、久保田競著「脳の発達と体」「手と脳」、ペンフィールド著「脳と心の正体」、伊藤正男著「脳と心を考える」、千葉康則著「脳を生かす教育」「先生と親に贈る脳生理学」、小出五郎著「脳-1400 グラムの宇宙」、オースタイン著「脳ってすごい」、立花隆著「脳を究める」「精神と物質」、コチュラック著「脳科学探検」、ダニエル・ゴールマン著「こころの知能指数」等などでした。

私はこのときの体験を元に、子ども達の教育を、脳生理学上、科学的に分析し、理論的に系統化することができ、吉塚幼稚園のカリキュラムを見直しができたと考えています。そして、近年脳の解明が急速に進み、新しい事実も判明し、この改定が間違っていなかったことを確信できた事は、何より嬉しい事でした。

さてそれから私の退院の日が近づいてきました。
15歳 7月のことです。続きのお話は次回です。